

### 紙飛行機の達人 子ら「すっげー」

高橋 勲さん(75)

子どもたちに輪ゴムを使った紙飛行機の飛ばし方を教える高橋勲さん。東京都町田市、清川卓史撮影



青空に吸い込まれるように垂直に上昇する紙飛行機。校舎の屋上よりも高く、舞い上がる。

「すっげー、めっちゃ飛ぶよっ」

歓声をあげる子どもたちを笑顔で見つめるのは、高橋勲さん(75)。東京都町田市を中心に活動する町田紙飛行機倶楽部の会長だ。市立本町田小学校で10月に開かれた「本小まつり」で、倶楽部のメンバーと一緒に、輪ゴムで飛ばす紙飛行機の作り方を指導していた。

紙飛行機の魅力にとりつかれたのは小学生のころ。長いブランクがあったが、電気設計関係の会社を63歳で退職したとき、「定年後の趣味にしよう」と思い立った。

倶楽部のメンバーは50代から80代の15人。地元の公園や「こどもの国」(横浜市)などで、紙飛行機のイベントを定期的に行き、遊びに来た子どもたちに教えている。小学校などからの指導依頼も毎月のようにある。

もちろん1人でも楽しむ。

予定のない日は、自慢の紙飛行機を車に積み、早朝5時から公園へ。「上昇した紙飛行機が、上空で水平に向きを変え、旋回しながらおどてくる。飛び具合をみて、目で見えないぐらいの微調整をします。奥が深いですよ」

趣味は紙飛行機だけではない。数年前に近所の仲間とシニアのクラブを立ち上げた。ウォーキング、ダーツ、パソコン、川柳、壁新聞発行——。メニューは盛りだくさん。ITに強い高橋さんは、スマホのカレンダーでスケジュール管理をしているが、予定は常にびっしりだ。「次から次にやりたいことがでてくる。10月は休みが3日間だけ。現役時代よりも忙しいですよ」

数ある趣味のなかでも紙飛行機への愛着は格別だ。「あの世にいくときは、棺おけに紙飛行機を入れてくれて頼んでます。お花じゃなくてね」。高橋さんはそう言っていて笑った。